

# 令和3年度第2回小学校ゼミナール議事録

2021年度8月24日(火)

於：オンライン(teams)

発表者：河村真由美(広島大学大学院院生), 植田悦司・結城和夏・中林玲奈(広島大学附属小学校教諭)

参加者：小山正孝(広島大学教授), 影山和也(広島大学准教授), 植田悦司(広島大学附属小学校教諭) 他7名

## 1. 協議の概要

今回のゼミナールの目的は、附属小学校の先生方の研究報告について議論し、研究をさらに発展させることである。ゼミナールは、河村先生からメタ認知研究についての報告、附属小学校の先生方の発表、質疑応答の順で行われた。

## 2. 協議の実際と質疑の要約

はじめに、河村先生からメタ認知についての特集号である ZDM の 51 巻 5 号の紹介がなされた。紹介の最後に、(1)メタ認知のチェック、(2)メタ認知の明示的指導、(3)対象の変化、(4)評価法の変化に注意することの重要性が指摘された。

続いて行われた附属小学校の先生方からの発表では、まず、附属小学校の研究の全体像が述べられた。附属小学校では、自分の解釈にとどまらず、他者の考えも受け入れるという態度の育成が目標である。ここで「態度」とは、社会的相互作用によって育まれるものであるとしている。そのため、日々の授業実践においては、社会的相互作用を生み出すような活動を大切にしている旨が述べられた。態度の変容については、算数作文や振り返りシートで捉えることを試みている。

次に、附属小学校の各先生から授業実践の報告がなされた。中林先生は、児童が式の中の数しか読まず、数関係を捉える式から場面を読むことができていない傾向を指摘した。その改善を目指して、児童が同じと捉えてしまいがちな「求残」、「求補」、「求差」の比較を促すような授業を構想し、実践の成果を報告された。結城先生は、算数レポートによって、メタ認知の変容を捉えていた。はじめは、自己の解釈が多い児童も、先生からのコメントによって他者の解釈の記述も増え、先生とのコメントと児童自身の相互作用で、メタ認知に変容が起きていることが報告された。植田先生は、「あまりのあるわり算」の授業を例に、本来、「習得 → 活用」の流れで行われることの多い授業展開に対して問題提起を行い、「活用 → 習得」の流れで展開される授業の重要性を提案された。

最後に、質疑では、「メタ認知と認知・非認知の関係」、また、「メタ認知と知識・技能の関係」の整理が必要であること、「メタ認知が学習を進めることや目指す態度育成のエネルギーになっているのか」ということに対して、再考する必要性が指摘され、次回の課題として残された。

(文責：友田勝士)